

# 公民館かながわ



目次

特集

「学校と公民館」……………2

厚木市立南毛利公民館

杉山文則

平成十六年度 館長・公民館

運営審議会委員等研修会…4

「公民館が拓く書

こどもの読物世界」……………5

県生涯学習文 財課

サークル紹介 ……………6

「ツールペイント

サークルマインレット」

(松田町立公民館)

「むつみ会」

(三浦市初声市民センター)

わが館の自慢事業 ……………7

「発進！史跡ガイド

海 ボランティア」

(老名市中央公民館)

職員からの一言 ……………8

座間市立東地区文化センター

川島聖子

関東甲信越静公民館 ……………8

研究大会実行委員会経過

編集 後記 ……………8



## 特集その②

## 「学校と公民館」

## 「子どもを地域で育む視点で」



おなじ地域の教育機関として、連携を模索する「学校と公民館」ですが、今回は公民館事業に取り組む中に、地域の教育力として先生の協力や、例えばボランティアとして児童、生徒の参加・協力を得るなど、学校の機能・組織とどのように連携できるか、その可能性を考えます。

ご依頼は「公民館と学校の連携」をテーマに具体的な実践報告をとということですが…公民館と学校とが、組織的に系統的に協働して、ひとつの事業を展開していく事例は、まだそう多くはないと思っています。

子どもたちの健全な育成を願って、子どもたちの生活力の養成、体験学習の必要性、地域の教育力の再生など、さまざまな問題が論じられ、それらの議論を通して、学校と地域の連携の必要性が重要な課題となってきたのは周知のことと思いますが、地域の活動の重要な部分を占めている公民館と学校との連携となると、まだまだこれからの課題という感じがしています。

確かに学校と地域との関係は、「開かれた学校」とか「総合学習」などの実践を通して、近年特に大きな進展を見ていると思いますし、公民館の地域の子どもたちに対する講座やイベントも年々増加をし、かつその成果も年々上がっているように思います。

厚木市教育委員会の刊行している「平成十六年度 生涯学習事業のまとめ」によりますと、公民館の子どもを対象にした講座は、単発的なものが多いものかかなりの

## 広がる国際交流

表紙の写真は、ふるさとまつりの「国際交流のひろば」で披露されたドミニカ共和国の代表的な踊り（音楽「メレンゲ」）です。この歌と踊りは熱狂的な動きもみられ、カリブの熱い太陽と海の香りがただよってくるような雰囲気を感じられました。

この他にも、ブラジルやタイの音楽・踊りを楽しみながら、それぞれの国の文化・生活習慣等の理解を深めるとともに地域住民との交流が図られました。

現在、愛川町の人口は、約四万三千人で全人口に占める外国籍住民の割合は5.4%（二千三百二十人）と県内市町村の中で、最も高い比率を示しています。

そこで、国籍を超えた幅広い交流を通して異文化を理解していくことが町の文化を豊かにすることにつながるという考えのもと、国際交流事業を展開しています。

特に公民館では、地域住民と外国籍住民がお互いに学びあい共生しあうことをめざした国際交流活動を推進しています。

愛川町



数になっています。

厚木市には十四公民館と一分館があります。そこで実施している子どもたちを対象にした講座は、その「まとめ」の中に分類されている「青少年の体験活動などを考えた講座」がそれに該当すると思えますが、六十四講座あります。

内容的には親子で作るうどん教室・ケーキ作り教室・理科実験教室・サッカー教室・歴史探訪などさまざまです。担当する講師も地域のボランティアの人・中学生、高校生、中学高校の先生、大学の先生と色々ですが、そのおこなわれている事業は、学校との協働によるものよりは、放課後ないしは休日に子どもたちの校外活動に公民館が関わっている事業が主体であると思います。

そこで、ここでは学校との連携というよりは子どもを対象にした講座、教室の事例を私が席を置きます南毛利公民館を例として、若干紹介させていただきます。

その一つは南毛利中学校の先生と生徒を講師に夏休みに実施した「親子実験教室」です。十五年度は、牛乳パックを使って小麦粉に電流を通して蒸しパンを作ったり、ビニール袋で熱気球を作ったりする実験をしました。親子二十四名

が参加しました。

身近な材料を使って科学への興味を培うのが一つの目的ですが、それよりも親子での参加ということと、中学の生徒が実験指導をするということにポイントを置きました。受講した小学生も大きな興味を示してくれましたが、指導してくれた中学生の諸君も新鮮な経験をしてくれたものと思っております。小学生と中学生との間の交流も生まれ、一つの意義があったかと思っております。

同じような理科の講座を、小学生に夏休みの自由研究のテーマを提供する目的で、中央農業高校の先生と生徒にお願いしてバイオの実験教室を開きました。五月にダンボールで無菌室を作り、非常に発芽しにくいランの一種の種まきをして、自宅でその生育を観察しながら七月に苗の寄せ植えをおこなうものです。二十一人の小学生が参加しました。先生の助言は当然ですが、小学生への指導は全て生徒が行いました。大変真摯に指導してくれて、非常に興味ある体験ができたと思評でした。これも前の事例と同じように、指導する者と指導を受ける者との交流が生まれ、今後も続けたい講座のひとつと思っております。

また、公民館祭りの前日祭には南毛利中学校のブラスバンド部員による公演を行っています。顧問の先生の熱心な指導により、多目的ホールが観客で一杯になるほどの素晴らしい演奏を披露してくれています。公民館祭りには欠かせない事業の一つとなっています。このほか、夏休みには、サッカーの基礎、基本を楽しく学ぶサッカー教室を、小学校一、二年生を対象にして、湘南ベルマーレのコーチを講師に二日間実施しています。これも毎年好評で厚木市全体から小学生が参加してきます。



以上どこの公民館でも行われている事例かもしれませんが、二、三紹介いたしました。しかし、子どもを対象にした事業はまだ少ないと思っております。子どもの価値観も多様化しています。子どもたちが求めている、子どもたちに必要な講座や教室をできるだけ多く、展開することが今後ますます必要になってくると思えます。そのための議論も必要と思えます。

厚木市では、地域子ども教室推進事業の実施に向けて今年度検討を始めています。その中で、全体のコーディネートが公民館の役割として位置づけられています。実施面ではいろいろと問題があるかと思えますが、これらの実施に向けての議論を通して、今、子どもたちに何が必要なのか、また、子どもたちは何を望んでいるのか、そしてそれに対して地域として何ができるのかが見えてくるのではないかと期待しています。それによって学校と公民館の連携のあるべき姿も見えてくるのではと思っております。

厚木市立南毛利公民館  
館長 杉山文則





平成十六年度館長・公民館運営審議会委員等研修会

テーマ「これからの公民館はどうあるべきか」



静公民館研究大会につながる有意義な研修会となるよう、期待を込めたあいさつがありました。

次に、来賓としてお迎えした県生涯学習文化財課中山耕造課長代理より、今期の県社会教育委員の会議テーマで公民館を取り上げるようになったこと、県に対して指定管理者制度に対する問い合わせが増えてきたことなど、今公民館が注目されていることについてふれるとともに、日ごろの県の取組への理解と協力に対する感謝の言葉を述べられました。

一 講義

人権・同和教育の推進について中教育事務所指導課社会教育主事鈴木義邦氏より、人権・同和教育指導者の心得と、公民館職員として常に心がけておくべきことについて、施設などのハード面、講座やたよりなどのソフト面から話をされました。地域の人が集い、学ぶ公民館における人権教育の必要性を改めて学びました。

二 シンポジウム

講義に続き「これからの公民館は

どうあるべきか」をテーマとしてシンポジウムが行われました。

コーディネーター

神崎 節生氏(神奈川県公民館

連絡協議会会長)

シンポジスト

杉山 住子氏(相模原市立大野

公民館利用者)

南 英毅氏(元藤沢市公民館

運営審議会委員)

植松 賢也氏(座間市立北地区

文化センター主査)

栗原 旭氏(秦野市立南公民

館館長)

はじめに、植松氏から、公民館の事業に関して「公民館事業の歴史的な蓄積や、地域の学習要求を捉えなおす時期にきている。事業が思うようにできない理由を予算や職員減のせいにしてはいけない」また、館長に対して「事業は館長の権限で行う」という意識を持つてほしい。館長には、学習課題に対する国・市町の基本施策や社会的な評価について見識を持つことが求められる」と語られました。

次に、行政内の公募により四月から館長に就任した栗原氏からは、今年度の公民館運営の重点目標達成のために、「専門分化した行政課題を生活者の視点から再構築すること」「公民館は友情に出発した実践教育

・相互教育・総合教育の場であることを忘れないこと」を意識して公民館運営を行っている」と力強く語られました。

「地域のことを知りたい」「子育ての不安」等をきっかけに公民館の利用者になった杉山氏からは、「住民主体の公民館にするために職員は、住民の学ぶ姿を見ながら、一緒に学習し協働してほしい。地域住民も公民館がやってくれるもの、作ってくれるものという意識でなく、自主的・自発的に学習する姿勢を持つことが大切である」として、「問題の多い世の中から公民館が必要である。公民館活動が住民に浸透すれば、犯罪も少なくなる」と語られました。

元公民館運営審議会委員で学校長であった南氏からは、「地域の教育力がなくなったといわれるが、なくなったとは思わない。潜在的な教育力を引き出すのが公民館の仕事である」「五十年前の公民館に戻ってみよう。公民館は地域の関係づくり、環境づくりが大切である」と語られました。

質疑では、「前向きな考え方は分かったが、実際に公運審は具体的にどう行動すればいいのか」「家庭教育が大切だと思うが継続的な振興をどのように展開するのか」など、会場から多数の質問が寄せられました。

平成十六年度館長・公民館運営審議会委員等研修会が十月二十一日(木)に厚木市ヤングコミュニティセンター250ホールで開催されました。前日の台風二十三号で避難所になった公民館もあり、出席できない市町がありました。百四十名の出席者がありました。

はじめに、神崎会長より、避難所

となった公民館に対するねぎらいと今日の研修会が来年度の関東甲信越





「公民館運営審議会と公民館との関係」についての質問では、「公民館運営審議会は、もっと公民館の運営に関して提言をしていくべきである」とコーディネーターである神崎氏が熱く答えました。

最後に、神崎氏から「公民館五十年の歴史を振り返り、変わっていること変わっていないこと（不易流行）を考えてほしい。公民館は教育機関であり、単なる集会の場所ではない。公民館は人と人とのつながりを大切にしてほしい」とまとめられました。



## 公民館が拓く子どもの読書の世界

平成十六年度一月に、県子ども

読書推進計画が動き出しました

### 神奈川県生涯学習文化財課

子どもの読書活動は、子どもが言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことができないものです。

とりわけ、これからの社会は、人々が生涯にわたり、いつでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果を適切に評価されるような生涯学習社会です。

このような社会の中で、読書は、自ら課題を見つけ、学び、考え、行動する力や豊かな人間性等の「生きる力」を育む重要な手段といえます。このように、読書の意義を考えるとき、子どもたちに、生き方や学ぶ方を身に付けるための素材を豊かに提供してくれる「すぐれた本との出会い」を、子どもの成長に応じて適切に準備したり、子どもたちが読書に親しむことができるような環境づくりに努めたりしていくことは、

私たち大人の役割であると考えます。

神奈川県教育委員会では、今年一月に

「かながわ読書のススメ」と題した神奈川県子ども読

書活動推進計画を策定し、子どもの読書活動の推進を図っています。

その推進計画は、「子どもが読書に親しむための環境づくり」「家庭・地域・学校のそれぞれが、教育機能

の特性を活かした、子どもが読書に親しむための機会や場づくり」「すべての子どもが自主的にいつでも、どこでも、読書活動ができるように学校や図書館、公民館などの関係施設、関係団体とが連携・協力するための体制を整え、併せて社会全体で子どもの読書活動を進めていこうという

気運を高めること」の三本を取組の柱として、これから県が取り組む子どもの読書活動の推進にかかる施策の方向性や取組内容を示しています。その具体的な取組の一つとして、

「子ども読書活動推進モデル地区事業」があります。この事業では、県内に七つのモデル地区を指定し、地区ごとに地域の特性を活かして、

図書館・公民館等の関係施設と読み聞かせボランティア等の関係団体、そして、学校とが連携・協力した取組を進めており、その成果をモデル地区を越えた県内各地に広めていくことをねらいとしています。

そのことをより効果的に進めるためには、地域に根ざした施設である公民館に期待するところが大きいことはいまでもありません。

公民館は、地域のボランティア活動の重要な活動拠点の一つですし、放課後や土・日曜日の子どもたちの居場所となつて欲しい重要な施設です。

そのような公民館でボランティアが行う「お話し」に乳幼児が親子で参加し、読書の楽しさを親子のふれあいの中に感じたり、小・中学生が「読み聞かせ会」で、すてきな本と出合い、読書の世界を広げたりできるような活動を展開できたら、どんなに子どもの読書活動を充実させることができ、生き生きとした地域づくりを進めることができるでしょうか。

これからの公民館が、子どもたちの読書の世界に深まりと広がりを与えてくれる地域のキー・ステーションとしての役割を担ってくれることを心から願っています。





## サークル紹介

<その1>

### トールペイントサークル マーガレット 松田町立公民館

トールペイントは、身の回りの道具に気に入ったペイントを施す、誰にでもできる工芸です。私たちのサークル『マーガレット』は、子育てを通して知り合った母親たちのグループで、月二〜三回、公民館の一室にそれぞれ思い思いの素材を持ち寄ってペイントに励んでいます。このような作品制作が主な活動ですが、一つの場所に集まって、子育て・家庭・自分のことの悩みや喜び



の話をすることも、明日のためのエネルギー充電に役立っています。

もとは別の場所で活動していましたが、二〇〇二年に公民館公認サークルとなり、私たちは、大きな二つのメリツトを得ました。

まず一つは、トールペイントは絵具・筆・素材などたくさんさんの道具を必要としますので、駐車場のある松田町の公民館は大変便利だということ

また、公民館の文化祭に出品・展示することがメンバーの大きな励みになっています。普段はおしゃべりに興じ、製作に手が止まることの多いメンバーも、九月になると俄然張り切り、十月末の文化祭に向けて作品を仕上げていきます。二〇〇二年の秋には姉妹町の千葉県光町の文化祭にも出品させていただき、大いにメンバーの士気が高まりました。

サークルの活動日は毎月二〜三回と決まっているだけで不定期です。パートなどで多忙なメンバーに合わせて、翌月の活動日を決めているのです。ちよつと面倒な作業ではありますが、これが長続きの秘訣かなと考えています。



## サークル紹介

<その2>

### 「むつみ会」 三浦市初声市民センター

私たち「むつみ会」の活動内容は和服を洋服にリフォームすることです。ここ二〜三年和服のリフォームはかなり一般的になってきましたが、私たちはそれら先駆けて七年前からサークルとして活動しています。

毎年秋に行われる市民センター祭りにファッションショーを開き、メンバー全員が自分の作品を着てモデルとして参加しています。見に来てくださった方からは「着物や羽織・帯などが思いもかけないような洋服になっていて驚いた。」「素晴らしいかった。」「素晴らしい。」等多くの感想をいただいています。

私たちが用いている和服はほとんどが古着で、いただいたものやリサイクル市で買ったものです。

中にはとても古いものもあり、ほどこのに大変なものもありますが、何か昔の人のぬくもりのようなものを感じ大切に扱っています。虫食いやシミのあるものもデザインを工夫する事でいろいろな洋服にできとも楽しいです。洋裁の経験がない人から、洋裁学校に通っていた方まで様々なメンバーですが、初心者でも裏付のものに挑戦したりして自分だけの「一点物」作りに日々励んでいます。「作った服を着て出かけたなら視線をすごく感じた。」ちよつと声をかけてくれたら良いのにね。」などと活動中は手と同様に口も良く動く私たちですが、それが良い刺激になっているようで、作品作りもより楽しくなっています。

(指導者 深谷範枝)



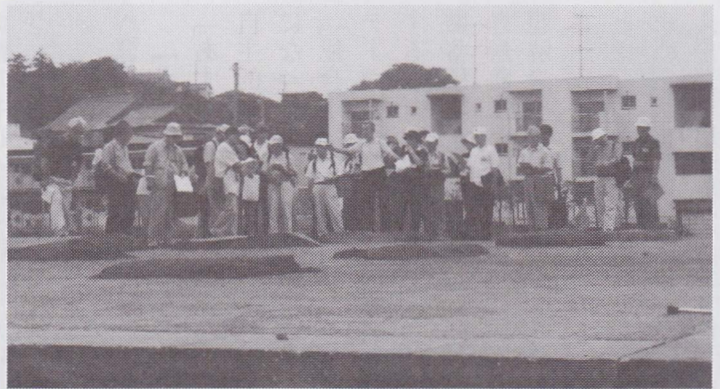




## わが館の自慢事業

### 「発進！ 史跡ガイドボランティア」

#### 海老名市中央公民館



相模国分寺跡での勉強会

神奈川県中央に位置するわがまち海老名は、古代・天平時代に建てられた相模国分寺、国分尼寺跡があります。国分寺は全国的にも珍しい法隆寺式の伽藍配置といわれ、現在は一部七重の塔及び僧坊の基壇復元をはじめ公園整備をすすめていますので、その様子が想像できます。他にも市内に多くの史跡文化財が点在しております。公民館講座でも「海老名の歴史を学ぶ」「市内史跡見学」などの学習講座を開くと、常に満員になるほど市民の関心が強いものでした。

平成十二年から三年間にわたり、市民の企画により「郷土海老名を知らう」という講座を九シリーズ開催しました。終了間際になって、せっかくなのでここまで学習した受講生を次に結びつけるためにどうしたら良いかと悩んで文化財課に相談したところ、「歴史と文化のまちづくり」を市民参画協働型ですすめたいということでした。そこで十五年度四月から「史跡ガイドボランティア養成講座」を一年（十三回）かけて開催しました。歴史の勉強はもちろん、他市のボランティア活動グループの視察に出かけたりしながら、海老名独自の活動、役割を自分たちで考えて進めていきました。一年後の今年四月に総会を開き、二十九名の会員でいよいよ活動開始です。養成講座は公民館（生涯学習課）が開催し担当しましたが、会が独立してからは、文化財課が担当となります。

まだ初心者マークのガイドです。から、初年度は「歴史のさんぽみちコース」を市民対象で二ヶ月に一回くらいのペースで開催しました。会員はコースの下見をしたり、勉強会を開いたりとても熱心です。また地区別や項目（石仏、古道など）別に分かれて研修を重ね、できただけ全員がガイドするように試みています。小中学校や自治会からもガイドしてほしいとの依頼があり、うれしい悲鳴を上げている状態です。

晴天に恵まれた十一月七日（日）海老名駅前で、会の活動PRと文化財の紹介を含めてイベントを開催しました。駅前施設ピナウォークに集まるお客さんたちは若い方が多く、ミニコースガイドには赤ちゃん連れのご夫妻も参加され、初めての試みでしたがまずまずの一日でした。

養成講座も二期目に入り昨年との違いは、一期生が講師になってガイド実習を経験していることです。その養成講座も間もなく終了して一期生に合流します。一期生の熱い思い、志は二期生にも伝わっているようです。

試行錯誤の一年が過ぎ、会員が増えるこれからは、会の活動をどうするかが問われていくでしょうが、いきいきとした会員を見る限り『歴史と文化のまち・海老名』の魅力を多くの人に伝えてくれるでしょう。

史跡ガイドボランティア

矢澤美加菜

## 職員からの一言

座間市立東地区文化センター  
社会教育指導員



川島 聖恵

### 『学びの仕掛け人を目指して』

『いちばん学ばせてもらったのは私自身だな。……そう感じながら毎日過ごしてきました。』

子供会育成会活動をしていた八年前、その活動が縁で座間市の東地区文化センターに社会教育指導員として就くことになりました。ごく短期間の教員経験はあったものの、成人も対象とする社会教育はまったくの素人です。そんな素人の私が講師に学び、受講生に育てられ、仲間を支えられてここまでできてしまいました。

私の担当は高齢者学級「あすなろ大学」「幼児をもつファミリー学級」など、センター主催の講座企画・運営です。その中で「あすなろ大学」は十六年目を迎える歴史の長い高齢者学級です。高齢化社

会に向けて高齢者が健康でいきいきと生きることを目的として開講し、当初より、担当する先輩職員の方の意気込みを感じる内容でした。そんな「あすなろ大学」も時代とともに変化していきます。受講生はかつての「高齢者」お年寄りというイメージからは程遠い、若々しく知的好奇心旺盛な人たちがばかりで、「あすなろ大学」を自らの居場所として活躍しています。プログラムは年間を通じて四十回ほどの講義と、自主活動の七つのクラブ活動で構成されています。講義の中心は「一月ごとの時事講座」「郷土学習」そして六年前から始まった「大航海ゼミナール」(調べ学習)です。

「大航海ゼミナール」は、「あすなろ大学」が活発な自主的活動をするきっかけになった講座です。学校の「総合学習」と同じく自らテーマを選び、調べ、発表する学習です。従来の「知識蓄積型学習」に対し、「課題解決型学習」です。「課題解決型学習」をする場合、当然我々職員も従来の講座とは違った役割や仕掛けが求められます。それは、答えを差し出す役ではなく、

学びを援助する役割です。(片岡則夫氏著「クックとタマ次郎の情報大航海術」(リブリオ出版))。

八年前には素人だった私ももう言い訳できません。愛すべき受講生と共に、本来学びは自主的なものであるということを理解しあい、学びを援助する指導員を目指していきたいと思えます。

「それにしても指導員の私が楽しませてもらうって申し訳ないなあ。」

## 編集後記

テレビ番組の「金八先生」がシリーズで放映されています。金

曜八時の枠だから「金八先生」であつたはずなのに、これが今度は「金曜十時では……」との声。

塾や習い事などで、八時に家にさせられてしまいます。県の健全育成条例の児童夜間徘徊規制時間が延長されたり、深夜テレビが高視聴率でゴールデンタイムに移つたりと、「夜は大人の時間」として住み分けられていた境界は、グローバル化と消費型社会の構造の中で歪んではいけないだろうか。

「ビデオでいつでも見られるのに……？」今年特集として取り上げた「学校と公民館」を編集しつつ、皆で考え込んでしまいました。

### 「関東甲信越静公民館研究大会」

#### 実行委員会経過

去る11月25日、26日に亘り、関東甲信越静ブロック理事会が行われ、かねてより県公連実行委員会で練られた大会開催要項案が、概ね承認されました。

大会のテーマは「地域社会の創造・再生をめざす公民館の運営～教育機関として豊かな地域社会を育むために～」です。

これに合わせて、14の分科会を関東ブロック1都10県の公連が割り振って担当します。2月の理事会で決定いたします。

神奈川公連は、すでに提案の段階で、本県の分科会担当を示しています。

担当するのは、第1分科会「住民が公民館に今求めているもの～公民館利用者からの提言～」、第2分科会「公民館運営審議会の活性化について」、第9分科会「人権意識と学習～地域の中の国際化～」、第13分科会「職員体制の整備～職員の養成と専門性～」の4つです。

来年度、5月(未定)の総会時は、研究大会の拡大実行委員会を兼ねます。理事、評議員のみなさまのご出席をお願いします。